

言語学と生物学の統合における心理的要因

尾島 司郎 (滋賀大学)

言語学で言うメカニズムと、生物学で言うメカニズムが、概念的性質において異なっているのではないか、という問題は、今回のような研究者間の対話や、今後の分野横断的な研究を通して、解決されていくことが期待される。しかし、さらにその先にある言語学と生物学の統合を達成するためには、概念の擦り合わせといった学術的な課題に加えて、ある種の心理的な問題を乗り越える必要がある。本発表では、これまで言語学が(人間対象の)脳科学との統合を目指した過程で、心理的要因が研究にどのように影響してきたのかを紹介し、今後、言語学が(動物対象の)生物学との統合を目指す際に起こり得る同様の問題を予想したい。まず言語学は、言語が人間の認知機能、ひいては脳機能の一部であるとの立場に立ち、研究を行ってきた。人間の脳活動を非侵襲的に観察するERP(事象関連脳電位)やMRI(核磁気共鳴画像)などの手法が登場すると、言語学者もそれらを用いて、脳科学と統合しようと試みたのは自然な流れである。この試みに重要な影響を与えたのが、現状の言語学と脳科学の間のミスマッチと、言語学の实在性を脳のレベルで証明したいという心理だった。前者は学術的な問題であるが、後者はそうではない。しかし、この心理が実際の研究活動を大きく左右した。現在、言語学は動物対象の生物学とかつてない程、接近している。その中で、言語学者の心理が研究の行方を左右する局面が再度、生じている。発表では、言語の特異性を生物進化の中でどのように説明するのかという問題が、言語学者の心理にどう影響され得るのか例示したい。